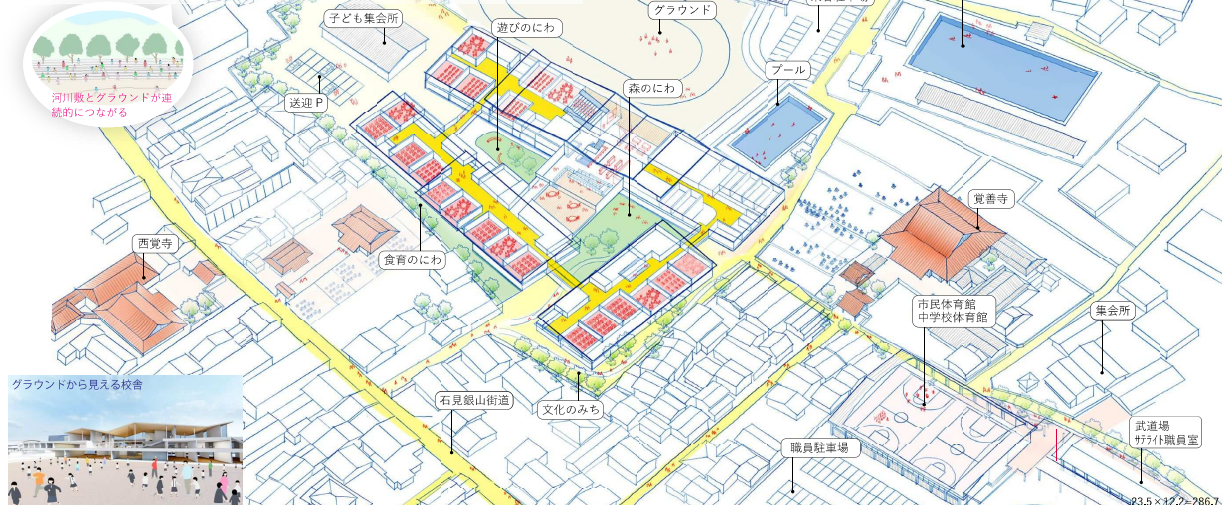


十日市・まち・みち つながる学びの場

少子化や人口減少などの課題を抱える日本においては、各地域が特色を生かし、これからも活力を維持していくために、「地域ならではの学び」を実現することが重要です。十日市小中学校の建設を契機に地域と教育の結びつきを考え、教育環境を整えます。

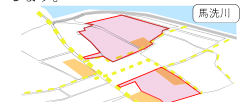


02 みちでつながるまちと学校

①地域と共存する学校

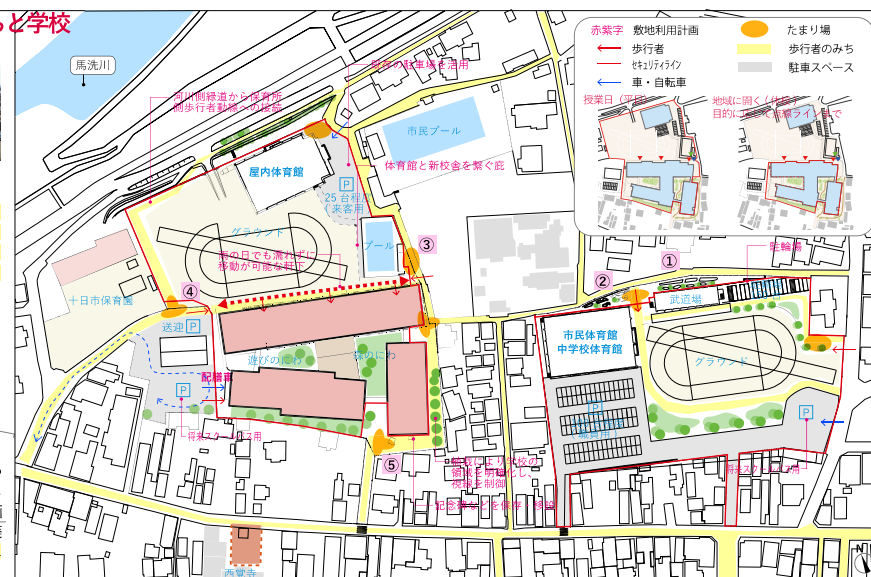


現況の地域に見守られているグラウンドの状態をセキュリティなどに対応した形に再編します。敷地の正門付近に植栽とベンチによるたまり場を設け、十日市の古いまちの区割りによる小道によってネットワーク化した地域と共に共存する学校を目指します。



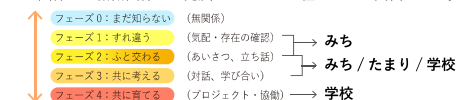
②安心安全な交通・動線計画

来校者・送迎・給食搬入経路などの歩行者分離に努め、児童生徒が安心して通学、敷地間の移動を行える計画です。自由学区や将来の学校の統廃合を見据え、スクールバスの送迎に対応した敷地利用計画とします。



03 歩行者ネットワークの再編

地域との関わり方は、学校施設の部分的な地域開放だけではなく、ふとした挨拶やすれ違いもコミュニティ構築のきっかけになると考えます。そのためには、学校周辺にたまり空間を設け、すれ違いやあいさつの関係から協働関係へと発展するコミュニティの種をまちに実装します。



01 原風景を感じ、未来へつなぐ学びの場

① 地形を学び・活動のフィールドとする。

学校敷地は、これまで「ひと」や「もの」の流れを育んできた馬洗川や石見銀山街道の近くに位置します。新しい学校は、生活や文化を紡いできた歴史により創られた資源や地形など地域特性を活かした計画とします。既存の建物の再構築のきっかけとなる建設プロセスとします。また、過去の災害を振り返り、防災・減災に配慮した安心安全な施設づくりを行います。

② 150年間の歴史・想い出の保存・継承

旧小中学校に残る思い出を皆で共有し、地域の愛着を深め、シビックプライドに繋がる計画を行います。既存校舎で保存されている民俗資料や学校周辺に残る史跡等の保存の在り方について、ワークショップで話し合い、展示方法や活用方法を建築計画に盛り込みます。

③ 周辺と親和性のある屋根並み、風景を取り込む学

住宅地側の校舎ボリュームは2階建てとし、勾配屋根で住宅地側に軒を下げることで、隣地への影の範囲を狭くし圧迫感を軽減させます。グラウンド側は川越しに山を眺めることが出来るため、妻入りの屋根形状とし、風景を取り込む計画です。屋根の色味は、近隣のお寺や住宅に馴染むよう検討します。

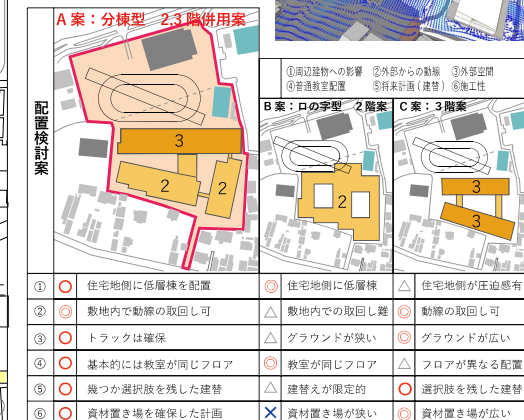
④ 災害に強い新校舎、自然の豊かさ、怖さの学び

地震や水害を対策として、設備機器は想定浸水高さ(100年確立)より高い位置に配置します。児童生徒の避難については外階段を設けることで近隣住民も3F外部テラスへ避難できる建物とします。これらを日常的に自然の豊かさとともに、自然の怖さ子ども達に伝えます。



③まちの風景との親和性の向上、合理的な配置計画

校舎外壁ライン、フェンスを安全かつ都合良く使い分け安全でありながらまちの風景に溶け込む外部空間を作ります。まちからの視線の抜けを作ることでもちからも学校の様子がわかり活気が伝わりと共に見守られる学校をつくります。



④災害時にも機能する校舎

補助避難所として一時的な避難の受け入れを行い、十日市エリアの中で大きな屋外活動エリアを有している特性より、必要に応じて災害時にも対応できる施設仕様を検討します。また、ドリアージ対応などの運用についても協議・検討を行います。



⑤新校舎と連携する地域に開かれた中学校敷地

武道場の1Fの半分をサテライト職員室とし、休憩・治療スペース、新校舎との連絡機能を設けます。また、体育館と武道場の間から学校敷地への入口を整備します。また、武道場1Fの残り半分は地域スペースとし、コミュニティスクールの授業や一般講座を行うことを検討します。



